

巻頭言「文学部新カリキュラムの理念と背景」文学部長 大槻俊夫……1
〔機構／共通科目〕共通科目ラーニングアウトカムの展開……2
授業「文章表現法」のスタンダード化へ……2
〔GCP〕勉学への弛みなき挑戦……3
〔CETL〕2011年度CETLの活動について……4
〔WLC〕自律学習環境を整える取り組み……6
FD活動……7
学士課程教育機構の事務体制が拡充……8
新授業「社会貢献とボランティア」開設……8

■ 文学部が変わる

文学部新カリキュラムの理念と背景

文学部長 大槻俊夫

昨年来、検討を重ねてきた文学部の新カリキュラムが確定し、来年度からスタートすることになりました。本稿では、この新カリキュラムの基本的な理念と背景について簡単に説明させていただきます。

今、日本ではグローバル化とそれに伴う産業構造、経済環境の大きな変化が起きています。それは文学部にとって決してアゲインストの風ではありません。語学教育は文学部の強みですし、変革期に求められる自立した個人は、本来リベラルアーツ教育が目的としてきたものです。幅広い教養や人間に対する深い理解も求められており、これも従来、文学部の教育が提供してきたものです。ただし、こうした社会の変化を本当にフォローの風として捉えるためには、これまでのカリキュラムを少し変える必要がありました。

新カリキュラムでは従来の8専修から社会福祉専修だけを残し、それ以外は11のメジャーに改編しています。これは単に専修をメジャーに細分化したということではありません。現行カリキュラムでは専修ごとに必修科目があるなどカリキュラムがそれぞれ独立していましたが、新カリキュラムでは各メジャーの提供する300ほどの科目の中から、学生は自分の知的関心に従って、自由に科目を履修することになります（メジャーの科目はイントロダクトリー、ベーシック、アドヴァンストにレベル分けされています）。哲学、歴史、文学、言語学、社会学などを幅広く学ぶことで、広い視野と問題関心を身に付けるというリベラルアーツの理念に近づいたといえます。

専修の枠を外すことで科目の多様な組み合わせが可能になり、学生は自分だけのオリジナルなカリキュラムをつくることもできますが、その分、自分が何を学びたいのかを常に自らに問いかける自立した主体的な学習者であることが求められます。こうした学生の学習をサポートするために、1・2年の前期にゼミ形式の科目が置かれています。また専門的なディシプリンの訓練の場として3・4年次の演習と卒業論文が必修とされており、ここで専門性を深めること

が期待されます。メジャーについては、登録を行い、一つのメジャーから一定の単位数を習得すれば、メジャーの修了を認めることになります。

グローバル化に対応できる異文化コミュニケーション能力の育成も新カリキュラムの目的の一つです。共通科目での英語、第2外国語の学習に加えて、学部独自にグローバル科目という枠で英語、中国語、ロシア語、ドイツ語、スペイン語の科目が置かれています。またメジャーとしても英語、日本語、中国語、ロシア語での異文化コミュニケーションを学ぶことができ、これらの語学系の科目を文学、歴史、地域研究などのメジャー科目と結びつけて学ぶことでグローバルな教養に裏付けされたより深い異文化理解が可能になると考えています。

新カリキュラムが理念とするリベラルアーツは特定の職業のための教育ではなく、より普遍的な知的・精神的な能力を育成することで、幅広い視野と自立的な判断力を備えた人材、いわばリーダーを育てる教育です。変動の時代をリードする「人間主義の勝利の指導者」を文学部から輩出していきたいと考えています。



2011.7.22文学部の集い

学士課程教育機構(SEED)・共通科目

共通科目ラーニングアウトカムズの展開

副機構長 西浦昭雄

前号において、学士課程教育機構では8項目の共通科目学習成果(ラーニングアウトカムズ)を策定し、2011年前期にアセスメント・パイロット授業での実施を行っていることについて報告しました。これまで19の授業から報告書が提出され、機構スタッフでとりまとめ作業を行っています。私自身はパイロット授業を担当しながら、シラバスに記載している授業の「到達目標」の到達度をいかに測定するかについて試行錯誤してきました。こうしたラーニングアウトカムズの取り組みは、継続的な授業改善のサイクルに反映してこそ意味があると思われまますので、次年度のシラバス作成の際には工夫していきます。

後期には、全11の科目群を網羅したり、検証が必要とされる項目を補完したりするため、新たに8つのパイロット授業を実施する予定です。現在、パイロット授業報告書や各所からの意見をもとに8項目をそれぞれ3~4の細目にブレイクダウンする作業に入っています。さらに、来年度より各教員が担当する共通科目のシラバスを作成する際に、授業の到達目標がラーニングアウトカムズのどの項目に関連するかをシラバスで明記することを目指して作業を進めています。2012年度以降は、共通科目の各11科目群の中から幾つかの授業を抽出し、ラーニングアウトカムズ測定実施を開始していく予定にしています。

授業「文章表現法」のスタンダード化へ

学士課程教育機構 准教授 清水強志

学士課程教育機構では、本年4月、「文章力向上ワーキング・グループ」(座長:関田一彦CETLセンター長、教育学部教授)を立ち上げ、プレイスメントテストの実施形態やその活用の検討、授業「文章表現法」の拡充、さらに将来的なライティング・センターへのスムーズな連動などについての検討が始まりました。

なかでも、前期からは、日本語文章作成能力(「書く力」)を向上させるために、「文章表現法a」のリニューアルが行われ、統一シラバスのもとでの授業が開始されました。また、シラバスだけでなく、配布資料や評価基準も統一し、授業のスタンダード化を実現させました。

これまで、本授業への履修希望者は多く、ニーズの高い授業であったにもかかわらず、2010年度の履修者数は146人(Semester平均)でした。そこで、授業内容だけでなく、担当教員を増やすことで制度的な拡充も行いました。その結果、提供コマ数はこれまでの3コマから12コマに増え、498名の学生が履修することができました。

他方、本授業の拡充に当たり、CETLのASTAC(アスタック、カリキュラム連携型学習スキル訓練プログラム)と連動させることも重視しました。ASTACとは、CETLの提供するサービスの1つで、事前にCETLと打ち合わせ・検討をした上で、CETLの学習支援サービスを活用しながら授業を展開するというものです。具体的には、2つのサービスを利用しています。1つには、

学期末の最終レポートを提出する前に、CETLで「レポート診断」を受け、そのチェック項目をもとに修正を加えさせるというものです。もう1つは、テーマ設定、文章構成など、自分一人の力ではうまく遂行できない場合に、CETLが提供する学習スキルセミナーを学生に利用させるというものです。

後期には、「文章表現法a」の他に、スタンダード化を意識した「文章表現法b」も開始しました。ここで、「文章表現法aおよびb」について簡単に紹介します。2つの授業では、どちらも講義と実習を組み合わせながら、実際にレポートの作成を行います。レポートを作成するためには、文章力、読解力、思考力(論理性、クリティカル・シンキングなど)が必要になります。文章力には、表現力の他に、引用の仕方などの学術的な「文章作法」が含まれます。そこで、「文章表現法a」では、文章作法を含めた文章力を中心として、レポート作成に必要な基礎スキルについて学びます。他方、「文章表現法b」では、読解および思考過程(クリティカル・リーディングおよびクリティカル・シンキングなど)を重視しています。

今後、2014年度からの「文章表現法」の必修化(2単位)をにらみ、授業改善のPDCAを通して、より学生のニーズに合わせた授業を展開していきます。

グローバル・シティズンシップ・プログラム — 勉学への弛みなき挑戦

学士課程教育機構 准教授 佐々木諭

グローバル・シティズンシップ・プログラム（GCP）は、いよいよ2年目後期を迎えました。プログラム自体は、学生が卒業するまでの4年を対象としていますが、英語、プログラムゼミ、社会システムソリューションというGCPの主要科目は、前半2年間で終了します。その意味において、今期は2010年度入学GCP1期生にとり、2年間の集大成となります。

■プログラムゼミの最終ステージ —プログラムゼミⅣ

GCP授業の中でも、プログラムゼミはキャリアプラン能力、アカデミック・スキル、リサーチ・スキルの育成を目標に掲げており、今期は最終ステージのプログラムゼミⅣが始まりました。西浦昭雄教授、山崎めぐみ准教授が担当するプログラムゼミⅣは、プログラムゼミの到達点として、地球の問題群といわれる環境問題や資源・エネルギー問題、貧困・食糧問題、民族紛争やテロについて、多角的・学際的にアプローチを進め、問題の解決策を社会へと提案することに挑戦していきます。これまでのプログラムゼミⅡ・Ⅲで習得したアカデミック・スキルと政策課題の探求力を応用し、問題解決型授業の手法を用いて主に協同学習によって授業をすすめていきます。この学習過程を通して、リサーチ力、グループディスカッション力、プレゼンテーション力、文章作成力といったアカデミック・スキルを引き続き磨くとともに、社会への発信力も培っていきたくと考えています。プログラムゼミⅣの成果は、12月17日（土）の発表会を通じ、大学内外に発信していく予定です。

■大学内外で活躍するGCP生

GCPが開始してから一年半が経ち、GCP1期生は、これまでの勉学によって積み上げてきた能力を学内外で発揮し始めています。去る8月に開催された学生主催のビジネスコンテストでは、GCP1期生の須藤英男さんと竹中智さん（両名とも経済学部経済学科2年生）が、1次選抜の課題審査を通過し本選に出場しました。須藤さんの所属したグループは、予選ブロック1位（5グループ中）となり見事決勝ラウンドに進出し、準優勝を勝ち取りました。須藤さん個人は、1次選抜に提出したビジネスプランが300名を越える全応募者の中から上位3名に選ばれました。須藤さんはビジネスコンテストでの活躍を振り返り、「GCPのプログラムゼミで鍛えた論理的思考力や批判的考察力が、ビジネスモデルを作る際に大変に役立ちました。また、プログラムゼミや英語授業はグループワークによる課題が多い為、グループで協働して互いの強みを引き出しながら一つのを創り上げる作業は、まさにGCPの経験が活かされました」と語っていました。

学内では、GCP1期生の齋藤勇一さん（文学部人間学科2年生）が北京大学、後藤希さん（文学部人間学科2年生）が清

華大学の交換留学生に決まりました。北京大学と清華大学は中国のみならずアジアを代表する大学であり、留学をとおして中国語の習得とさらに専門の研鑽に挑戦すると決まっています。二人ともTOEFL-ITPのスコアは600点を越えており、英語においても優れた結果を示されています。英語と中国語を駆使し世界に羽ばたくことを期待しています。

■飛躍的な英語力の向上

GCPの成果と言えば、やはりGCP生の英語力の飛躍的な向上をあげることができます。ネイティブスピーカーによるレベルの高いかつ献身的な授業とGCP生の日頃の研鑽の努力により、1期生の25人（78%）がTOEFL-ITP550点相当（TOEFL-iBT、TOEIC換算点も含む）のスコアを越えています。2010年4月入学時では、TOEFL模試スコアで550点を越えたGCP生が2名だったことを思えば、一年半で著しく英語力が向上しています。また、2期生はすでに14人（52%）がTOEFL-ITP550点を越えており、1期生の昨年のペースを上回る勢いで英語力が伸びています。

■「地球市民」—挑戦をし続ける生き方

GCPが目指すものは、日本も含め世界で活躍する「地球市民」を育成することにあります。その「地球市民」とは、創立者池田大作先生のコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの講演によれば、「生命の相関性を深く認識しゆく『智慧の人』」であり、「人種や民族や文化の`差異、を尊重し、理解し、成長の糧としゆく『勇気の人』」であり、「遠いところで苦しんでいる人々にも同苦し、連帯しゆく『慈悲の人』」であります。いずれも「しゆく」という表現が用いられていることから明らかなとおり、「地球市民」とは、ある一定のスタティックな状態を表すのではなく、「智慧」、「勇気」、「慈悲」を求め挑戦し続けるダイナミックな生き方にあると考えます。まさにGCP生は、日々自己の研鑽に挑み、人間性を磨き続けている「地球市民」であり、今後も世界の何処の地にあって「地球市民」たらんと挑戦し続けることと信じています。



協同学習を軸とするプログラムゼミⅣの授業風景

2011年度前期 CETLの活動について

前期セメスターでは、教育支援の事業として、FDセミナーを3回、教育サロン（ブラウンバック）を15回行いました。また、学外で行われる研修や学会イベントにも、教員を派遣しました。学習支援の事業では、学習セミナーを大幅に拡充し、文章力アップ講座や文献読解スキル講座、対人関係力アップ講座、数学力アップ講座、自己管理能力アップ講座、図書館と連携しての図書館活用力アップ講座など、75講座を開講しました。

これらの活動に加えて、2009年から始まった大学教育推進プログラム「初年次・導入教育を支える学習支援体制整備」の取り組みとして、カリキュラム連携型学習スキル訓練（ASTAC）

や学業不振学生への特別な支援プログラム（オアシス・プログラム）を実施しました。

ASTACでは、5つの授業（48コマ）と連携し、レポート診断や学習セミナーを行いました。オアシス・プログラムでは、アカデミック・アドバイザーの先生方に少しずつ認知されるようになり、5名の学生が個人的なコーチングや個別指導を受けました。また、多様な学生のニーズに対応する指導法の修得および教授法の調査・研修のために、教員を学外のさまざまな講座に派遣しました。

なお、前期活動に関する詳細は、以下の表をご覧ください。

学士課程教育機構FDセミナー 教員向け

日付	テーマ	講師
2011.5.13	「学習の質を評価する」ーパフォーマンス評価の考え方と方法ー	松下 佳代 教授（京都大学）
2011.6.29	学習意欲と学習指導	中谷 素之 准教授（名古屋大学）
2011.7.16	協同学習の基礎	関田 一彦 教授（教育学部）

CETL教育サロン（FDブラウンバック） 教員向け

日付	トピック・テーマ	コーディネーター
2011.5.23-7.14	「大学の授業の設計」(沖裕貴先生) 「初年次教育の取り組み」(山田礼子先生) 「高等教育研究史」(有本章先生) 「教育メディアの利用」(宮田仁先生) 「学生授業評価の読み方と授業への活用」(安岡高志先生) 「青年期の心理」(白井利明先生)	清水 強志 准教授（SEED）

学習セミナー 学生向け

時期	スキル エリア	講座開講数
2011 前期	文献読解スキル講座（9） 文章力アップ講座（18） 数学力アップ講座（10） 図書館活用力アップ講座（11） 自己管理能力アップ講座（19） 対人関係力アップ講座（8）	75

レポート診断 GP事業

時期	診断を利用された授業	利用学生数
2011 前期	文章表現法a 経済学部基礎ゼミ 経営学部基礎ゼミ	1025

学外研修派遣（GP） GP事業

日付	派遣研修視察先	派遣教員名	主催
2011.4.16-4.24	マインドマップアドバイザー研修	清水 強志 准教授（SEED）	松岡 克政（プザン協会公認定トレーナー）
2011.4.21-8.4	アクションラーニングコーチ養成講座	関田 一彦 教授（教育学部）	㈱ラーニングデザインセンター
2011.8.31-9.1	初年次教育学会第4回大会	関田 一彦 教授（教育学部）	初年次教育学会

学外研修派遣 (CETL) GP事業

時 期	派遣研修・視察先	派遣教職員名	主 催
2011.6.15	Japan Private Universities FD Coalition Forum (JPFF) 関東圏懇談会	清水 強志 准教授 (SEED)	JPFF
2011.5.27	大学eラーニング協議会	金子 徹哉 (CETL)	大学eラーニング協議会
2011.6.17	活字文化推進機構 プレースメントテスト	関田 一彦 教授 (教育学部)	活字文化推進機構
2011.7.8	教育ITソリューションEXPO	望月 雅光 准教授 (経営学部)	教育ITソリューションEXPO
2011.7.28-29	e-Learning WORLD 2.0	金子 徹哉 (CETL)	e-Learning WORLD
2011.7.28-8.1	Adventure Based Counseling研修	安田 賢憲 准教授 (経営学部) 久保田秀明 教授 (教育学部)	Project Adventure Japan (PAJ)
2011.7.31-8.1	第4回「大学生研究フォーラム2011」	清水 強志 准教授 (SEED)	京都大学

アドバイザー研修 GP事業

時 期	内 容	講 師
2011.4.15	コミュニケーションパワーアップ講座	杉本 薫 (米国NLP協会認定トレーナー)
2011.4.21	コーチング研修フォローアップ	
2011.4.14	マインドマップリーダー研修	上田 誠司 (ブザン協会公認マインドマップインストラクター)

2011年度後期 CETLの活動について

CETLは教員向けと学生向けのセミナーを開催しています。主な日程は以下の通りです。

学士課程教育機構FDセミナー (CETL担当分) 教員向け

日 付	テーマ	講 師
2011.11.15	全国50大学100人のベストティーチャーの授業参観から見てきたもの	遠山 紘司 教授 (神奈川工科大学)
2011.12.10	第9回全学FDフォーラム	※FD委員会主催
2012.1.20	ICT活用教育の実践	望月 雅光 准教授 (経営学部) 福田 伸枝 助教 (CETL) 鈴木 夕佳 助教 (CETL)

CETL教育サロン※ (FDブラウバック前半スケジュール) 教員向け

日 付	トピック・テーマ	コーディネーター
2011.10.17	現代の高等教育① 金子元久 氏 (東京大学)	清水 強志 准教授 (SEED) ※「FDブラウバック」は、毎週月・木12:30よりCETL事務室で行われる、20~30分のオンデマンド視聴です。CETLのHPからも申し込み可能ですが、当日参加も歓迎です。各自、昼食はご用意ください。 ※サロンとしては他に、「カリキュラム改善懇談会」(2014年のカリキュラム改訂に向けた学部間の情報提供の場)など、様々な企画中です。お気軽にご参加ください。
2011.10.20	発達の原理① 西垣順子 氏 (大阪市立大学)	
2011.10.24	現代の高等教育② 金子元久 氏	
2011.10.27	発達の原理② 西垣順子 氏	
2011.10.31	現代の高等教育③ 金子元久 氏	
2011.11.10	発達の原理③ 西垣順子 氏	

学習セミナー 学生向け

時 期	スキル エリア	講座開講数
2011.9.13~12.21	文献読解スキル講座 (12) 文章力アップ講座 (29) 数学力アップ講座、図書館活用力アップ講座 (9) 自己管理能力アップ講座 (19) 対人関係力アップ講座 (12) マインドマップ講座 (4)	85

CETL フォローアップセミナー※ GP事業

時 期	トピック・テーマ	講 師
2011.10.14	コーチングの手順の復習とアンカーリング法	杉本 薫 (米国NLP協会認定トレーナー)
2011.12.20	アンカーリングの復習とタイムライン技法	
2011.11.11	マインドマップの活用事例検討	山崎 めぐみ 准教授 (SEED)

※本セミナーは、過去に行われたCETLのコーチング及びマインドマップのセミナー参加者が対象です。

WLC—自律学習環境を整える取り組み

ワールドランゲージセンター

WLCのセルフアクセス施設

創価大学ワールドランゲージセンターの大きな特徴である、「居ながらにして世界を体験できる空間」。英会話を実践するChit Chat ClubやEnglish Forum、多言語や文化を学ぶGlobal Village、英語で書くための個別指導を提供するWriting Centerなど、さまざまなかたちの「キャンパス内留学」を体験できる環境が整っています。こういった施設を総称して「セルフアクセス施設」と呼びます。「セルフアクセス (self-access)」とは文字通り、存在するリソース (資源) に自分からアクセスする (利用する) ことです。本来のセルフアクセスとは、誰かから言われたからというものではなく、学習者が自分で選択し、自分の必要に応じて判断し利用します。

英語学習相談室

このような充実したリソースをどのように利用していいのかわからない、多すぎる選択肢からどのように取捨選択すればいいのかわからない、そのような学生のために、コンシェルジュ的な役割を担うために開設されたのが英語学習相談室です。

英語学習相談室の開設当初は、知名度が低く利用者数も僅かでしたが、開設5年目の2010年度には年間の利用者数は全学生1割にのぼり、多くの学生の自主学習を支援してきました。セルフアクセス施設をどのように活用するか、どのように英語を学習したらよいか、という質問が多く寄せられます。言語を習得するためには、授業はもちろんのこと、授業外でも継続的に相当量の自主学習を行っていくことは不可欠です。

How to Study Flyers (学習法リーフレット)

学習法や教材を、英語学習相談室によく寄せられる質問のトピックごとにまとめたのが「How to Study Flyers(学習法リーフレット)」です。リスニング・スピーキング、リーディング、TOEFLの勉強法など、12種類のリーフレットを作成しセルフアクセスセンターの3か所に設置しました。年間4000枚ほどのリーフレット活用動向を観察したところ、TOEFLやTOEICの資格試験に関するものに続いてスピーキング練習方法が多く参照されていることが判明しました。語学の自主学習において学生はコミュニケーション能力を身に付けたいという目標があり、さらに多くの学生が、就職活動や留学のための資格試験に向けての勉強をかなり意識しているといえます。また、年度始めの4月に最も多く参照され、それ以降下降気味になり、



10月の大学祭前後が最も落ち込む傾向にあることがわかりました。こうした動向を踏まえ、英語学習の質問が多くなる5月または動機づけが低くなる傾向にある10月などに英語学習法のワークショップを開催しています。

語学ポートフォリオ

このリーフレットを発展させた形で開発されたのが電子版「語学ポートフォリオ」です。セルフアクセス施設で利用可能なリソースが、習熟度別およびカテゴリー別に学習法の例と合わせて掲載され、学生は自分が学習したリソースの学習記録を4年間を通じて蓄積することができます。また、週間の学習記録に対してアドバイザーがコメントを送信する機能があります。この機能を利用し、2010年度から「語学ポートフォリオコンペティション」という形で自主学習支援を実施しています。基礎レベルの学生を対象に、担当スタッフが学期中の2か月間にわたりフィードバックし、TOEICのスコアアップを支援します。英語学習相談室のこれまでの利用者データで、基礎レベルの学生の利用率が低いことがわかっており、この層を対象に自主学習の支援を厚くするねらいがあります。

オンライン教材コース

並行して、初級レベルの学生を対象にしたオンライン教材を使ったコースを4年前から開講しています。対面授業とオンラインの自主学習を折衷したブレンド型授業で、担当教員が学期中に履修者のオンライン学習を監督し、必要に応じてフィードバックすることによって、TOEICのスコアアップを目指すとともに、自律した学習習慣の確立を目指した授業設計を行っています。

語学ポートフォリオコンペティションおよびブレンド型授業の両方において、スコアアップなど一定の効果を上げています。短期間であっても、語学に集中して取り組むこと、それに対して適切なタイミングでフィードバックすることによって継続的な自主学習の支援が可能であることが裏付けられました。セルフアクセス施設やリソースの利用についても、英語学習相談室の継続利用者がやがてアドバイスがなくても自己学習ができるようになるように、自律した学習者を育てるためには最初の足場となるようなサポートが必要であると言えます。

今後、語学ポートフォリオを利用した支援を拡大していくこと、また、オンライン学習の支援体制を強化していくことや、長期休暇期間においても継続した自主学習の支援を提供できるような仕組みづくりに取り組んでまいりたいと思います。それにより、学内の利用可能なリソースを充分活用できるような自律した学習者がより多く育っていくことを願っています。
(WLC 助手 石川由紀子)

◆WLCの今年度の予定から

10月28日 (金) 講演会 「世界のため、あなたにできること〜本当に意味のある国際協力とは」

講師：山本敏晴氏 (NPO法人宇宙船地球学理事長)
16時40分～17時50分 M401教室 (創価大学ワールド会と共催)

11月2日 (水) FDセッション 「ラーナー・オートノミー 理論と実践」

講師：勘坂泉、レイモンド・ヤスダ、ダレル・ウィルキンソン (WLC)
16時40分～18時 A321教室

FD活動

松下佳代先生「学習の質を評価する—パフォーマンス評価の考え方と方法—」に参加して

CETL 助教 鈴木夕佳

5月13日（金）、本年度第1回目のFDセミナーを開催しました。松下佳代先生（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）をお招きし、「学習の質を評価する」と題して、オルタナティブ・アセスメント、特にパフォーマンス評価に焦点をあて、その理念や特徴、実践例についてお話いただきました。これは、現在の学士課程教育の中で求められている、学習成果とそのアセスメント方法の1つです。

パフォーマンス評価とは、学生が実行・遂行したものを直接的に評価するというものです。紹介されたいくつかの実践例のなかでも、藍野大学理学療法学科で行われているOSCE-Reflection法による実践例がとても印象的でした。それは、従来のOSCE（Objective Structured Clinical

Examination：客観的臨床能力試験）の方法に、グループ・リフレクションを取り入れたものです。そのことによって学生は、ビデオ映像を見ながら互い

にパフォーマンスをふりかえることとなります。その結果、OSCE-Reflection法が単なる試験から学習のツールへと変化していると、松下先生はおっしゃっています。

この学生同士でリフレクションをすることで、試験までも学習の場にしてしまうという実践例は、大変参考になりました。おそらく、教師からの評価以上に、同級生からの評価というのは、学生にとって強い意味を持つてくると思われるからです。また、この方法により、学生は、知識を持つということと、実際にそれを行動に移してみるこの間に存在する「大きな違いと壁」を感じたに違いなく、その気づきが深い学びになっているのだらうと感じられました。

このような方法を、私自身が取り入れることができるか、と考えてみました。パフォーマンス、と一口に言っても、その種類はさまざまです。たとえば、私の担当している文章表現法の授業でいえば、レポートを書く、というのが1つのパフォーマンスといえます。しかし、その評価方法は多様であり、工夫次第で学習の効果を高めることができるのだということを、本セミナーによって実感することができました。学んだことを糧に、これからもより学生の学びになるような評価方法を工夫していきたいと思います。



中谷素之先生のFDセミナーに参加して

CETL 助教 福田伸枝

6月29日（水）、「学習意欲を引き出す指導～動機づけ心理学の視点～」というテーマで、中谷素之先生（名古屋大学准教授）による今期2回目のFDセミナーが行われました。本セミナーでは、最近の若者の学習意欲低下を問題とし、いかに若者のやる気を起こさせ、学習につなげていくかということを中心に自己決定理論、達成目標理論、自己調整学習研究の3つの動機づけ心理学の視点からご検討されていました。

私はその中でも特に、「やる気は伝染する」という主張にとても共感いたしました。それは、教師や友人、クラスメイトなどといった、「他者との関わり」を通して学習の動機づけに活かすということでもあります。つまり、メンターとしての教師の役割が学生の動機づけを刺激したり、またピア・ラーニングなどでの学生と学生という横のつながりが同等の仲間であるという意識を持たせ、個々の学生の動機づけを促したりするということです。そしてそのようなプロセスを経ることによって、やる気が他者へ伝染するというものであります。

私は本学で教鞭をとり始めてまだ半年ですが、多少なりともそのように感じた経験がありました。やはり、教師のモチベーションが低ければ学生にも伝わり、クラスの雰囲気重くなり、活発な授業運営をすることは不可能であると思います。このセミナーで得た知識を活かし、学生に、「あの先生の授業はやる気になる！」と言ってもらえるような授業を行えるように日々邁進してまいりたいと思います。



学士課程教育機構の事務体制が拡充

本年9月1日付で「学士課程教育機構（略称：SEED）」の事務体制が大きく拡充しました。これまで教務部の所管でしたが、今後は、学事部所管となります。これにとまない、学事部の中に学士課程教育機構事務室が設置され、共通科目運営センター、WLC、CETLの各センターおよびグローバル・シティズンシップ・プログラムの事務も学事部に移行されます。

今回新設された学士課程教育機構事務室ならびに各センターの職員体制は右の通りです。

<池ヶ谷事務長の挨拶>

学士課程教育機構は、これまでは教務部・教務第1課が担当しておりましたが、本年9月1日付で、学事部内に「学士課程教育機構事務室」が設置されました。

事務室は文系A棟1階・学生部奥に事務室を構え、正式にスタート致しました。GCPなど含めた学士課程教育、WLC、CETLを統合した部署となります。

「創造的人間の育成—21世紀の地球市民を目指して」との機構の理念を実現するために全力で取り組んで参ります。

学事部

部長 飛田 昌彦

学士課程教育機構事務室

事務長 池ヶ谷浩二郎
平野 正彦
蕨沢 賢一

教育・学習活動支援センター

金子 徹哉
奥田 恵子
奥山 恵

ワールドランゲージセンター

担当部長 久留米 弘
係長 高塩 真子
主任 比嘉美和子
稲葉 智子 林 知運
三浦 明子 平野 大作

新授業「社会貢献とボランティア」開設

学士課程教育機構 准教授 清水強志

東日本大震災を受け、創価大学では、震災地域への復興支援と学生に対する社会貢献教育を目的として、学生による震災ボランティア活動を促進することになりました。

そこで、まず、4月27日（水）と28日（木）に宮城県石巻市で、本学学生・教職員の総勢107名による「創大ボランティア」を実施しました（27日に実施したグループは61名、28日に実施したグループは46名）。夜行バスの中に2泊するというもので、機構の西浦教授と佐々木准教授がそれぞれの隊長を務めました。

また、この促進を実践的にサポートするために、2011年後期より「社会貢献とボランティア」授業を新設し、震災ボランティア活動を単位として認定することになりました。本授業の目的は、「学生の社会貢献の意識を高め、ボランティア精神を養い、ボランティアの実践能力を身につけること」にあります。

ボランティア活動は、「自主性・主体性」（自ら進んで行動する）、「社会性・連帯性」（ともに支え合い、学び合う）、「無償性・無給性」（見返りを求めない）、「創造性・開拓性」（よりよい社会をつくる）の原則の基づき行われる活動を指します。本授業を通してボラン

ティア活動に参加することにより、地域や社会の構成員としての自覚を深めるとともに、「社会に貢献する」とはどのようなことを考察することが期待されています。あわせて、立場や考えの異なる人とのコミュニケーション能力、自己管理能力、率先性やリーダーシップ、求められるニーズを調査・分析する能力、他者の立場に立って考える能力、自分の考えをもとに解決策を考案する能力などの涵養を目指しています（本授業「シラバス」より）。

なお、授業の一環としており、かつ、安全を第一とすることから、履修する学生には、(a) 事前講習会への参加、(b) 計画書の作成・提出（保険への加入）、(c) 実働45時間のボランティア参加、(d) ボランティア活動日誌とボランティア活動証明書の提出、さらに(e) レポート（4,000字）の提出が義務付けられています。第1期の事前講習（夏休み前）を経て、8月中に14名が最終的に登録しました。また、後期に行われた第2期の事前講習会には43名が参加しました。

本授業の履修を通して学生一人一人が自立し、成長の契機になることを期待しております。

Info

●本年度「FDフォーラム」のお知らせ

平成23年12月10日13:00より、創価大学S201教室において、第9回FDフォーラムが開催されます（FD委員会主催）。

本年度のFDフォーラムは、「大学の教育力が問われる時代のカリキュラム改革」をメインテーマにして二部構成で行われます。

第一部の基調講演では、大学の授業設計を研究されている沖裕貴先生（立命館大学）をお招きし、LOsとカリキュラムマップについてお話いただけます。また、第二部では、学士課程教育機構による、共通科目のラーニングアウトカムズに関するアセスメントの試みについて報告します。ぜひ、ご参加下さい。

編集後記

「巻頭言」では、来年度から新カリキュラムがスタートする「文学部」について大槻文学部長に語って頂きました。また、各部署の活動の他、SEEDの新事務体制についても紹介しています。

第2号も無事に発刊することができ、これで継続的な発刊に向けての体制および体裁が整いました。「ゼロ」からの創造にあたり、ご尽力いただきました方々に改めて御礼申し上げます。



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター[SEED] 第2号
発行日 2011年10月14日
発行者 創価大学学士課程教育機構
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
<http://seed.soka.ac.jp/>